

開催地名：佐賀県伊万里市	
開催日時	令和元年10月1日（火） 13：50～15：40
開催場所	伊万里市立国見中学校体育館
語り部	菅野 祥一郎（岩手県陸前高田市）
参加者	国見中学校生徒、教職員約280名
開催経緯	伊万里市では昭和42年7月に大水害が発生した。平成19年に、昭和42年の大水害から40年を節目として「市民防災の日」を制定したところであり、また、平成29年度は「市民防災の日」制定から10年目を迎え、市民の防災力向上の新たな取組として、中学生を対象とした防災教育事業を開始した。これは、「若いうちから防災に関する知識を深め、災害時に危険を回避するとともに、主体的に行動する力を身に付けさせることがこれからの課題である」と捉えていることから実施するものである。今回はこの事業に語り部をお招きし、東日本大震災の体験談・教訓を伺うこととしたい。
内容	<p>（1）はじめに</p> <p>私が住む陸前高田市は、岩手県の南端に位置し、隣はすぐ宮城県である。東日本大震災では津波の被害を受け、多くの命が失われた。津波には3つの特徴があると言われている。1つ目は一度に多くの命を奪ってしまうということ、2つ目は、遠くまで流された人の遺体が見つからないということである。そして3つ目は、いつのまにか忘れ去られてしまうということである。大きな津波は毎年来るものではない。忘れたところに突然やってくる。</p> <p>（2）絶対に子どもたちを助けるという信念</p> <p>地震が発生したときに所用で校外にいた私は、急いで学校に戻ろうとしたが、途中の橋が通行止めになり、想定外の時間がかかってしまった。戻った時、子どもたちや近隣の住民は校庭に整列していたが、既に津波は川をさかのぼり始めており、時間の猶予はなかった。私は、低学年から登れば渋滞してしまうと判断し、6年生から順番に、丸太の階段を使って隣の山の上まで登るように指示した。つい先ほどまで校門付近にいた数十人の人たちは、私たちのそばから消えてしまった。校舎に逃げた人たちは、屋上の貯水槽の上に登れた一人の方を除き、流してしまった。子どもたちが助かった理由は何か。そして住民の生死を分けたものは何なのか。それは、「誰よりも早く逃げることを決断したこと」に尽きると思う。</p> <p>（3）避難所では</p> <p>私の学校の子どもたちは全員が助かった。そして、何日かたってどんどん家族の迎えが来た。いや、正確には迎えに来て帰る家がないのだから、無事を確かめに来た、と言った方がいいのかもしれない。食べ物は小さなおにぎり1個。近くの冷</p>

凍工場から流れ出た冷凍秋刀魚を拾い上げ、焼いて食べた。不平不満を言うものは一人もいなかった。

みんなが一生懸命働いた。特に6年生と中学生が頑張った。そして、いたるところでこんな言葉が飛び交っていた。「見つかって、あ〜、良かった」。そして、10日後にはこんな言葉であった。「見つかって、あ〜、良かった」。そう、同じ会話である。2、3日はどこかで無事にいることを期待している。そして「無事で見つかって、あ〜、良かった」なのだが、10日も過ぎるともちろん無事な姿でいるわけではない。誰しもが諦めている。でも、たとえ遺体であっても「少しでも早く見つかって良かった」と思うわけである。同じ言葉でもこんなに違いがあったのだ。でも、ある子には最後まで誰も迎えに来ることはなかった。どんな思いで家の人が見れるのを待っていたか想像がつくだろうか。

(4) 皆さんへのお願い

皆さんに、以前教師だったという立場からお願いしたいことがある。それは「命を大事にしてください」ということである。まずは自分の命を、そして隣の人の命を。必死で逃げても命が尽きてしまった彼女。彼女だけでなく、たくさんの若い命が一瞬にして奪われた。どんなに怖かっただろう。想像しても想像しても、その恐ろしさ、苦しさは私にはわからない。こんな恐ろしい災害が起こるなんて夢にも思わなかったから。

しかし、人生には思いもよらないことが起こる。だから、今、この時を大切に生きていくことの幸せをかみしめてほしいと思う。そして、誰の命も大切にす人になってもらいたい。陸前高田の人は、大切な人をたくさん亡くした。でも、厳しい環境の中で、精一杯明るく前を向いて歩む人がたくさんいる。皆さんは自分の家がある。家族がいる。自分の学校がある。学校には広い校庭がある。友達がいる。当たり前なことだけでも素晴らしいことである。だから、家族や友達を大事にして、先生方のお話をしっかり聞いて、一生懸命勉強してほしい。



開催地より

津波の恐ろしさ、そして命の大切さを強く感じさせるとても貴重なお話だった。本日のお話を忘れず、命を大切にできる人間になってほしいと強く思った。生徒の心には、しっかりと刻みこまれたことと確信している。貴重なお話をしていただいた語り部に、本当に感謝したい。